

十字架にかかり、今まさに死なんとしているイエスは「わが神、わが神、なぜわたしを見捨てるのか(マルコ 15:34, マタイ 27:46)」と叫んだ。ところがルカ福音書は、「イエスは大声で叫ばれた。〔父よ、わたしの霊をゆだねます〕(ルカ 23:46)」と死の受容を伝えている。手本にしたであろうマルコ福音書とは異なる調子で。

十字架上のイエスの死を見ていたのは誰か。ローマ軍の百人隊長(23:47)、群衆(23:48)、女たちだ(23:49)。中でも「胸を打ちながら帰って行った(23:48)」群衆のことはルカだけが伝えている。

「群衆」とはどんな人たちなのか。同一の者でないにせよ、群衆が何をしたかざっと眺めてみよう。イエスの教えに打たれ、病を癒してもらおうと昼夜引きも切らず押しかけていた群衆。だが群衆は扇動されやすく希望は易々と逆恨みに変る。イエスを捕え(22:47)、「十字架につけろ(23:21,23)」と狂徒化し、処刑が近づくと微妙になり(23:27)、実際イエスが死んでしまうと嘆きになる(23:48)。

群衆をじっと見つめると一人ひとり皆それぞれに顔があり、おっ、私がいる、あなたもいるのではないか。

教えを受け継ぐ弟子たちはどこにいるのか。霧散し、逃げ去ってここにはいない。こっそり近づいたペトロは三度イエスを知らないと言ふ(22:61)、ユダは己が裏切りを悔いて自死した(マタイ 27:3~5)。こうしてみると弟子たちもまた、イエスにまっすぐ従えない「群衆」の一人なのかもしれない。

十字架を見つめていた群衆以外の、百人隊長と女たちはどうなのか。百人隊長は処刑する側の責任者で、なんと処刑執行者が「〔本当に、この人は正しい人だった〕」と言って神を賛美した(ルカ 23:47)。

女たちはどうか。女は証人に働かず、まして純粋でないガリラヤ女など問題外、というのが当時の価値観。彼女らは「遠くに立って、これらのことを見ていた(23:49)」。

遠くて表情は読み取れないが、その痛みはここまで伝わって来る。そしてこの女たちが、イエスの復活を最初に証言した(24:8~11)。

誰が十字架の死に立ち会ったのか。救いとはまるで縁遠いような三者だ。死んでもなおイエスらしいこの逆説。弟子でもなく、聖書の権威でもなく、「神の民」でもない、信仰の基準からすると決して義とされえない、もっとも外側にいる者たちが十字架をしかと見つめ、悔い改めている(23:47~49)。

既存の信仰からは遠い周縁の者たちの悔い改め。彼らが見守る中、イエスは「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます(23:46)」と言い、イエス自身の内で苦しんでいる神と共に死んでいった。

「ゆだねます」とは、「わが神、わが神、なぜわたしを捨てるのか」という、自問への自答なのかもしれない。

御子イエスと一つなる方として、十字架上で共に苦しみ抜かれた父なる神。その神の苦しみが世を覆い「全地は暗くなり~太陽は光を失っていた(23:44~45)」。

人間の力で「為しうる」信仰に劣化した義や聖性が、打ち砕かれる闇であった。その徴として「神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた(23:45)」。

暗闇が臨み(出エジプト 10:22)、「人々は~自分のいる場所から立ち上がることもできなかったが、イスラエルの人々が住む所にはどこでも光があった(10:23)」。

世が闇に閉ざされても、十字架を見つめる三者が三様にキリストの光を反射させている。教会はこの三者の、多様な光を受け継いでいる。



《おまけのひとこと》

十字架から水は三つに分岐して流れ出した 岩盤を 砂礫層を 沃地を浸透して 集められている
一部は伏流し 一部は淵に留まった後 海をめざす 一致しながら多様であり続けるキリストの体